

研究ノート

日本家族論ノート(4)

——中根理論への一批判——

清水浩昭

はじめに

本稿は、中根千枝教授が展開している日本家族論¹⁾を紹介するとともに、中根家族論のもつ限界についても言及しようとするものである。

1. 中根教授と社会人類学——問題関心をめぐって——

中根教授の主要な問題関心は、異なる社会（とりわけアジア）の社会構造の比較研究にあるといえよう。それでは、何故、中根教授はそれを社会人類学的視角から問題にしようとしたのであろうか。

それは、社会人類学が「社会科学の一つとして、1930年代から特にイギリスにおいて著しい発展をみせ、特色ある方法論をもっている。その一つの大きな特色は、諸社会の比較において、社会学などが『西欧社会』からでてくる理論をつねに規準として、他の社会に適用していくのに対して、社会人類学においては、『西欧社会』というものを比較の規準にしない²⁾」、つまり「“彼等”の制度を、“彼等”の論理をもって理解することこそその真髓であり、その因果関係の説明が説得的であるかどうか成功と不成功のわかれ目がある³⁾」という考え方への新鮮な魅力と、日本の社会科学は「いわゆる下部構造が上部構造を規定していくという考え方が強く、したがって、日本の工業化が西欧の水準に達すれば、社会のあり方も西欧と同様なものになるはずだという見方に支配されていたので、西欧にないような社会現象を一括して、日本の後進性とか、封建遺制と説明する傾向が強かった⁴⁾」ことへの不満がその（社会人類学への傾斜）根源となっているように思われる。

というのは、社会人類学は社会組織・経済組織が変わっても社会構造（一定の社会に内在する人間関

1) 上野和男助教授は、「日本の家族の構造を明らかにする研究上のひとつの問題点は、日本の家族を構造的水準において同質的な、すなわち単一の構造的特質をもったものと理解する立場をとるか、それとも、異質的であってさまざまな類型（多くは二類型もしくは三類型）をもったものとして理解する立場をとるかの基本的立場の差異にあると思われる。前者はいわば日本の家族の『一元的単一的理解』であり、後者は『多元的類型的理解』である」（上野和男「昭和初期における家族研究の展開——柳田国男と大間知篤三を中心として——」、家族史研究編集委員会編『家族史研究』第1集、大月書店、1980年5月、p.180）と述べている。

2) 中根千枝、『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書）、講談社、1967年、p.19.

中根教授は、西欧理論のみで、アジアの社会現象を解明できないことをインドでの調査経験を通じて会得していたのではなかろうか。

3) 蒲生正男、「社会人類学——日本における成立と展開——」、日本民族学会編『日本民族学の回顧と展望』日本民族学協会、1966年、pp.33—34.

4) 中根、前掲書、pp.15—16.

係の基本原則)が変らない社会も存在すると同時に、社会組織・経済組織は異っているにもかかわらず社会構造が同一である社会も存在していることを指摘してきたからである。ところが、他の社会科学は、社会組織・経済組織と社会構造との関連性に対する理解に徹底さを欠いていたように思われる。つまり、中根教授のいう社会構造を解明し、それを比較研究するのに有効な学問は社会人類学においてほかにないという結論に達したからであろう。このことが、中根教授をして、社会人類学へ傾斜させる起因となったのではなかろうか。

2. 社会人類学と家族研究

それでは、中根教授の社会人類学への依拠と家族研究とは、どのように連関しているのでしょうか。

この連関について、教授は「社会人類学では、家族は社会構造の基礎的な位置を占めるものであるとの見解をとっているが、社会における集団の構造、人間関係を考察する上に、家族は重要な示唆を与えるものであることはいままでもない。そして、その伝統的な家族制度は、そうした社会の人々の社会学的志向というか、理念が一定の条件を得て、よく顕示されたものであり、また、その制度が近代化によって崩壊していくプロセス自体にも、それがよく考察できるのである。したがって、これらと比較することは、とりもなおさず、異なる社会に内在する社会構造を考察する上に重要な手がかりとなる⁵⁾」と考えているのである。つまり、家族研究は「たんに家族という小集団のみを考察するのではなく、むしろ、家族というものを素材として、広く社会構造の研究に役立てたいという意図をもつものである⁶⁾」としているのである。このような考え方は「『家族社会学——これは社会全体を研究し、その歴史を研究するための、かけがえのない拡大鏡である』⁷⁾」との見解とある種の共通性があるといえよう。

このように、中根教授は社会人類学が社会構造の比較研究をめざす学問であり、その社会構造を明らかにする重要な手がかりとして家族研究を位置づけているのである⁸⁾。

3. 中根家族論の展開

(1) 家族構造モデル

社会人類学と家族研究との連関性が明らかになってきたので、つぎに、中根教授が展開している家族論をみてみたい。

教授は、様々な民族誌的事実を基礎にして家族構造の型を検討した結果、三つのモデルが抽出できたという。その三つのモデルとは、A=小家族、B=兄弟(姉妹)の連帯による大家族、C=父一息子の継承線を基盤とする家族である。これら三つの家族について今少し詳しい説明をきくと「Aは、

5) 中根、『家族の構造——社会人類学的分析——』、東大出版会、1970年、p. iii.

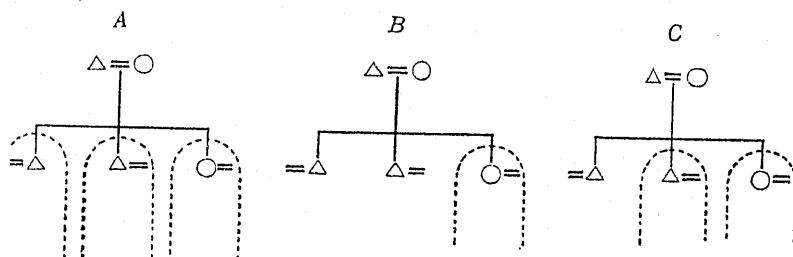
6) 中根、前掲〔脚注4〕書、p. 28.

7) ア・ゲ・ハルチュフ著、寺谷弘王〔訳〕、『ソ連邦における結婚と家族——社会学的研究の試み——』、創元新社、1967年、p. 15.

8) しかし、中根教授は、家族構造がわかれば社会構造が解明されたことになるかと述べているのではない。この点について、教授は「ファミリー・ストラクチャがわかれば、ソーシャル・ストラクチャが全部わかるというのではなく、一つの社会には人間関係ならびに集団構造を特色づける一定のストラクチャがあって、家族の構造もそれと無関係ではなく、むしろ、家族の構造にそれがよく反映されている。従って、家族の構造を分析することは、その社会構造を知る上に大きな示唆にとむものである」(中根『家族の構造』の著者から、『季刊人類学』第2巻第1号、1971年、p. 146)と述べている。

両親とその未婚の子供たちからなる小家族⁹⁾」であるから、「子供たちは結婚によってすべて両親のもとから独立して、新しく家族を形成¹⁰⁾」することになる。つぎのBは「娘は結婚によって両親のいる家族から出るが、息子は全部残り、それぞれ妻を迎え入れ、結果的には家族構成は大きくなる¹¹⁾」というものである。最後のCは「結婚によって両親の家族から去るのが原則であるが、家長（父）の後継者である1人の息子を残して、他の息子（たち）もその家族を去り、Aの場合のように独立の家族を形成するか、あるいは他の家族の後継者となる¹²⁾」という構造である（図1参照）。

図1 家族構造の三つのモデル



(資料) 中根『家族の構造』, p. 36.

これらの家族構造（A, B, C）に対応する残留制をみると、Aには（A-I）男子も女子もすべて生家を出るタイプと（A-II）夫婦ともそれぞれの生家に永住するタイプがあり、Bには（B-I）娘は生家を出、息子はとどまるタイプと（B-II）男子を出し、女子を残すタイプとがある。Cについては（C-I）息子1人だけ生家にとどまるタイプ（C-II）娘を1人だけ生家に残すタイプと（C-III）息子・娘いずれか1人を生家に残すタイプの三つになるというのである¹³⁾。

ところで、中根教授が展開している家族構造の三つのモデルは、家族社会学、社会人類学で提示さ

表1 家族構造論（中根家族論との対応関係）

研究者名	中根千枝	森岡清美 ¹⁴⁾	蒲生正男 ¹⁵⁾
名称	A = 小 家 族	〔夫婦家族制〕 どの子の生殖家族とも同居しないことを原則とする家族	〔核心型家族〕 末子相続もしくは、隠居制（世代別夫婦の別居制）
	C = 父—息子の継承線を基盤とする家族	〔直系家族制〕 1人の子の生殖家族とだけ同居することを原則とする家族	〔直系型家族〕 長男相続と親夫婦と子供夫婦の同居
	B = 兄弟（姉妹）の連帯による大家族	〔複合家族制〕 2人以上の子の生殖家族と同居することを原則とする家族	〔拡大型家族〕 姉相続もしくは配偶者を持った兄弟姉妹の同居と、親夫婦と子供夫婦の同居

9) 中根, 前掲〔脚注4〕書, p. 29.

10) 中根, 前掲〔脚注4〕書, p. 35.

11) 中根, 前掲〔脚注4〕書, p. 36.

12) 中根, 前掲〔脚注4〕書, p. 36.

13) 中根, 『家族を中心とした人間関係』（講談社学術文庫）講談社, 1977年, pp. 27—31.

14) 森岡清美, 「家族の類型と分類」, 森岡清美編『家族社会学』, 有斐閣, 1967年, p. 10.

15) 蒲生正男, 「戦後日本会の構造的変化の試論」, 『政経論叢』, 第34巻第6号, 1966年7月, p. 7.

れてきた家族構造論とはまったく異質なもののなのだろうか。

森岡清美教授（家族社会学）と蒲生正男教授（社会人類学）との家族構造論と対応させてみると、名称は異っているが、中根教授の家族構造論も従来の家族構造論と対応しているといえよう（表1参照）。

（2）日本家族論

わが国の家族構造は、中根教授が提示した家族構造の三つのモデルのどれにあたるのであろうか。

教授は、わが国の家族構造がC＝父－息子の継承線を基盤とする家族であり、その継承線（残留制）は（C－Ⅲ）息子・娘のいずれか一人を生家に残す方式であるとしている。

したがって、民俗学者等が研究してきた隠居制家族は、教授のいうA＝小家族の範疇に属していないことになる。この点について、教授は「隠居制については、古くから民俗学、民族学の分野でとりあげられ、応々にして地方的特殊な制度として注目されて来たが、これは要するに、世代の異なる夫婦が同一家屋で起居を共にしないという居住形態の処置である。家長権を息子にゆずった老夫婦が本屋を息子夫婦にゆずり、同一屋敷内の小屋に移り住むのであるが、これは『家』（社会単位）の中の処置であって、この居住形態は何ら『家』構造に支障を来すものでないばかりか、家長を中心とした『家』の構造がはっきりあらわれている¹⁶⁾」との見解をとっている。

教授の隠居制論を土田英雄教授の研究との関連でみると、中根教授の隠居制論は、土田教授のいう「別居自活型生産隠居」（親が次子以下をつれて本家から分立して形成した隠居分家が、^{ほんや}本家依存を離れて単独で自立するのは困難で、普通は次子以下の独立も、長子優先相続制のもとできびしく制限されるから、インキョは将来ホンヤに吸収されて消滅してしまう。いわゆる家族別居型の一時的なインキョ世帯¹⁷⁾）と理解しているように思われる。ところが、このような隠居とは別に、「核分裂隠居」（親も子も徹底した夫婦単位の小家族分立主義を貫いているような隠居¹⁸⁾）も存在していた（いる）ことに中根教授は気づかなかったようである。

いずれにせよ、中根教授は、わが国の家族が構造的に一つであるという立場に立って理論展開をしているといえよう¹⁸⁾。

むすびにかえて

以上、中根家族論の概略を紹介してきたが、要するに、中根教授の日本家族論は「一元的単一的理解」に立っているということである。

このような「一元的単一的理解」に立つ家族論でもって、わが国農村の家族を調査研究した場合、例えば、鹿児島県農村等にみられる、いわゆる「隠居制家族」（「核分裂的隠居」）に対して、どこまで説得的な説明ができるのであろうか、疑問として残るところである²⁰⁾。

16) 中根、「『家』の構造分析」、『石田英一郎教授還暦記念論文集』、角川書店、1964年、p. 104。

17) 土田英雄、「隠居制と家」、同志社大学人文科学研究所編『共同研究日本の家』、国書刊行会、1981年、p. 267。

18) 土田、前掲論文、p. 257。

19) 中根教授は、かかる家族構造論に立脚して社会構造論（「単一社会」——「単一家族」論）を展開している。したがって、蒲生教授が展開してきた「多元的社会構造論」——「多元的家族構造論」（これが地域を異にして存在してきた——いわゆる「地域性論」）は無視されている（この点については、中根、前掲〔脚注1〕書、pp. 187—189。を参照されたい）。

20) 何故なら「隠居制家族」は、「多元的類型的理解」に立ってはじめて、理解可能な家族類型である、と考えるからである。